

天祥地瑞神系表說明書

謹言

謹んで白す灵界物語第一卷より第七十二卷迄は、天之御中主大神より説きおこして神素盞鳴大神の神業を述べられてあります。天祥地瑞は天之御中主大神以前の天之世（幽の幽の杵界）に於ける灵界の大宇宙創造の神業を述べられたもので、実に前代未聞の神典であります。たゞの幽の幽からの活動を示されたものであります。約言すれば巖端ニ神の幽の幽からの活動を示されたものであります。

昭和二十七年三月十日

木庭次守

(追記)

本書は茨城主会が八回神書研修会（昭和廿九年自一月十三日至一月十五日）にあたり使用の為にプリントしたるものなり。

目次

子の巻	總説	一頁
第一章	天之峯火夫の神	六〇
第二章	高天	八〇
第三章	天之高火男神	一〇〇
第四章	◎の神	一二〇
第五章	言幸比古の神	一三〇
第七章	太	一五〇
第八章	国生み神生みの段	一九〇
第九章	杵具の木の実	二二〇
第十章	紫微の宮居	二四〇
第十一章	水火の浩動	二五〇
第十二章	国生みの旅	二七〇
一	高日の宮（高黒山）	三〇〇
二	玉泉郷（東雲の国）	三一〇
三	玉手の宮（三笠山）	三二〇

子の巻總説

三千大千世界の大宇宙を創造し給ひし、大因常立の大神はウ、声の言霊の御水
 火より天之道立の神を生み給ひ、宇宙の世界を教へ道き給ひたるが、教百億年
 の後に至りて、稚姫君命の灵性の御霊代として尊き神人と顯現し三千世界の修
 理固成を言依^{ことよ}給ひ、又アの言霊より生り出でし大元顯津男の神の御霊も神
 人と現れ共に神業^{みわざ}を勵^{もげ}み給ひける。天の時茲に到りて巖の御霊稚姫君命は再び
 天津御國に歸り給ひ、巖の御霊一切を瑞の御霊に受け継がせ給ひける。
 茲に巖の御霊瑞の御霊の浩勤を合して伊都能賣の御霊と現れ、萬劫末代の教を
 固むる神業に奉仕せしめ給ひたるなり。
 巖の御霊は荒魂の勇と和魂の親を主とし、奇魂の智と幸魂の愛は従となりて浩
 き給ひ、瑞の御霊は奇魂の智と幸魂の愛主となり、荒魂の勇と和魂の親は従と
 なりて共に現れ、今や破れむとする天地を修理固成すべく現れ出でたるなり。
 而して巖の御霊は經の神業なれば言行共に一々萬々確固不易なるに反し、瑞の
 御靈の神業は標縱與奪^{たてよみ}其權有^{けんあ}我の力徳を以て神業に奉仕し給ふ神定めなり。
 神諭にも、經の御用はビクとも動かれず鶉の毛の露程も変らぬが、瑞の御霊は
 緯の御用なれば機^{はたけ}の緯糸の如く、右に左に千変萬化の浩勤あることを示された
 り。然るに今や伊都能賣の御霊と顯現したれば、經緯兩方面を合して神代の顯
 現に従事し給ふこと、なりたれば、益々其行動の変幻出沒自在なるは到底凡夫ノ

一五	一四	一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四
伊佐子の島	鳥	葭原の國	怪體の島	建國祭の祭典	葦原の國	萬里の島	朝香比女の神	高地秀の宮司	西方の旅	玉藻の山	真嶺新國
五一	四九	四八	四七	四七	四四	四二	三九	三八	三七	三五	三三

以上

一 天之峯火神あめのみねのひのみかみ
 二 天之高火神あめのたかのみかみ
 三 天之高木比古神あめのたかのみぎはこ
 四 天之高木比古神あめのたかのみぎはこ
 五 天之高木比古神あめのたかのみぎはこ
 六 天之高木比古神あめのたかのみぎはこ
 七 天之高木比古神あめのたかのみぎはこ
 以上七柱の天神七代を天の古と稱し、天之御中主神より以下七代を天之御中之古と稱へ奉るなり。茲に、言霊學の力をかりて、大虚空に於ける最初の神々の御浩動を謹寫せむとして著はしたる物語なり。又神生み國生みの物語も最初の神々は幽の幽に坐しませば、現代人の如く男女の關係は無く、只言霊の水火と水火を結び合せて國を生み神を生み給ひしを知るべし。最初の神々は何れも幽體に於ける彦神姫神とは大に異なるを知るべきなり。

太元顯津男の神の神名はア声の言霊南西に浩き給ひて顯れ給ふ神名にして、國を生み神を生まし給ふと雖も、國を開拓し王の神業を國生みと言ひ、國魂の神を選ませ又は生せ給ふを神生みと稱へ奉るは、皇典古事記の御本文に徴するも明白なり。又八十比女神の國生み神生みの神業も、只單に言霊の水火の組合

せによりて言霊神の生り出で給ふ根本の御神業なるを知るべし。

惟神神代の生り出でし有様を
 神の力によりて説くなり。

言霊の天照國の人々は
 心を清く持つべきを知れ。

天も存く地もなく宇宙もなく、大虚空中に一点の、忽然と顕れ給ふ。この、
 たるや、すみきり澄みきらひつゝ、次第々々に擴大して、一種の円形をなし、
 円形よりは湯気よりも煙よりも霧よりも微細なる神明の気放射して、円形の圏
 を描き、を包み、初めて◎の言霊生れ出でたり。此の◎の言霊こそ宇宙萬有の
 大根元にして、主の大神の根元太極元となり、の大本となり給ふ。
 は此の◎の凝結したる萬古不易に傳はりし神霊の妙機として、言霊の助くる国
 言霊の天照る国、言霊の生くる国、言霊の幸はふ国と稱するも、此の◎の言霊
 に基くものと知るべし。キリストの聖書にヨハネ傳なるものあり。ヨとはあら
 ゆる宇宙の大千世界の意なり。ハは無限に発達開展、擴張の意なり、ハは声者
 の意にして宇宙大根本の意なり。ヨハネ傳首章に曰く「太初に道あり道は神と
 借にあり道は即ち神なり、此の道は太初に神と借に在き、萬物ニ水に由て造ら
 る造られたる者に一として之に由らて造られしは無と明示しあるも、宇宙の
 大根元を創造したる主の神の神徳を稱へたる言葉なり。清朗無比にして、澄切
 リ澄きとスースースーと四方八方に限りなく、極みなく伸び擴がり膨れ上り
 遂に◎は極度に達してウの言霊を発生せり。ウは萬有の体を生み出す根元にし
 てウの浩動極まりて又上へくと昇リアの言霊を生めり。又ウは下つて遂にオ
 の言霊を生む。◎の浩動を稱して主の大神と稱し、又天之峯火夫の神、又の御

名を大國常正神言と奉稱す。大虚空中に、葦芽の如く一点の、発生し、次第々々
 に膨れ上り、鳴り、て遂に神明の形を現じたまふ。◎神の神霊は◎の浩動力
 によりて、上下左右に擴がり、◎極まりてウの浩動を現じたり。ウの浩動より
 生れませる神名を宇迦須美の神と云ふ。宇迦須美は上にのぼり下に下り神霊の
 浩動を両分して物負の大元素を発生し給ひ、上にのぼりては霊魂の完成に資し
 給ふ。今日の天地の発生したるも、宇迦須美の神の功なり。ウーウーウーと鳴
 り、て鳴極まる處に神霊の元子生れ物負の原質生まる。故に天之峯火夫の神
 と宇迦須美の神の妙の動きによりて天津日鉾の神大虚空中に出現し給ひ、言霊
 の原動力となり七十五声の神を生ませ給ひ、至大天球を創造し給ひたること、
 實に畏き極みなりし。

大虚空中に、一點の、現れ、
 至大天界生れ給へり、

再拜

第二章 高天原

茲に宇迦須美の神は①の神の神言もちて、大虚空中に浩動し給ひ、遂にオの言を神格化して天津瑞穂の神を生み給ひ、高き昇りて天津瑞穂の神を生ませ給ひぬ。天津瑞穂の神は、天津瑞穂の神に御逢ひて夕の言を、高鮮の神、カの言を、神鮮の神を生ませ給ひぬ。高鮮の神は大虚中に浩動を始め給ひ、東に西に南に北に、乾坤異長上下の區別なくタラリタラリ、タラリタラリ、カカカカカカと言霊の光かやき給ひ、茲にいよいよタカの言霊の浩動始まり高鮮の神は左旋運動を開始し、神鮮の神は右旋運動を開始して圓滿清朗なる宇宙を構築し給へり。茲に於て両神の浩動は無限大の円形を造り給へり。この円形の浩動をマの言霊と云う。天津眞言の大根源はこのマの言霊より始まれり。高鮮の神、神鮮の神、宇宙に現れ給ひし形をタカアと云ひ、円満に宇宙を形成し給ひし浩動をマと云ひ、このタカアマの言霊、際限なく虚空に擴がりて果てなし、この言霊をハと云ひ、速言男の神と云ふ。両神は速言男の神に言依さし給ひて、大宇宙完成の神業を命じ給ふ。速言男の神は右に左に廻り、鳴り、螺線形をなし、ラの言霊を生み給ふ。この状態を稱してタカアマハラと云ふなり。高天原の六言霊の浩動によりて無限絶対の大宇宙は形成され、億兆無數の小宇宙は次で形成さるゝに至れり。清淨なるもの、霊子の根元をなし、重濁なるものは物質の根元をなし、茲にいよいよ天地の基礎は成るに至れり。未だ

速言男の神以前の古は宇宙なるもの無く、日月星辰の如き霊的物質形をとめず、虚空はたゞ灵界のみ創造され、物質的分子は微塵だもなかりけるが、この六言霊の浩用によりて、天界の物質は作られたるなり。これより天地剖判に至るまで數十代の神あり、之を天の古と稱し奉る。天の古は灵界のみにして、現界は形だにもなく、實に寂然たる時代なりき。この高天原六言霊の鳴り、て鳴り止まざる浩用によりて、大虚空に紫微圈なるものあらはれ、次第々々に水火を発生して虚空に光を放ち、其光一所に凝結して無數の灵線を発射し、大虚空をして紫色に耀く紫微圈層の古を創造し給ひぬ。紫微圈層について蒼明圈層現れ、次に照明圈層、次に水明圈層現れ、最後に成生圈層といふ大虚空に断層発生したり。この高さ広さ到底算ふべき限りにあらず、無限絶対無始無終と稱するより語るべき言葉なし。嗚呼惟神霊幸倍坐世。

すみきりて清くかしこき天界に

千萬の神生れましけり

主の神は高鮮の神、神鮮の神に言依さし給ひて高天原を造らせ給ひ、南に廻りて中央に集る言霊を生み、北に廻りては外を統べる言霊を生み、次ぎくんに東北より廻り給ひて声音の精を登揮し、萬有の極元となり、一切の生らざる處なき力を生み給ふ。此の言霊は自由自在に至大天球の内、外悉くを守り、涵し給ひ、宇宙の水火と現れ柱となり、八方に伸び極まり滞りなし。

八紘を統べ六合を開き、本末を貫き無限に澄みきり澄み徹り、吹く水火、吸ふ水火の活用によりて八極を統べ給ふ。此の神力を継承して以後の諸神は高天原の中心に收まり紫微圏層に居を定め、一種の水気を発射し給ひて雲霧を造り、又火の元子を生み給ひ、紫微圏層をして益々清く美はしく澄み徹らしめ給ひ、狭依男の神を生み給ひて紫微の霊国を無限に無極に開かせ給ひ、茲に清麗無比の神居を闊き給ひぬ。狭依男の神の又の御名を天之高火男の神と云ふ。何れもタカアマハラと言霊より生りませる大神にして神威赫々、八紘に輝き給ふ。天之高火男の神は天之高地火の神と共に力を合せ、心を一にして天の世を修理固成し給ひて、蒼明圏層に折々下りて天津神の住所を闊かむと、茲に諸々の星界を生み出で給ひて、晝夜間断なく立浩き鳴りく、て鳴り止まず坐しぬ。天之高火男の神、天之高地火の神の二神はタカの言霊より天界の諸神を生り出で給ひ、莊嚴無比なる紫微宮を造りて主神の神霊を祀り、晝夜敬拜して永遠に鎮まり給ふ。紫微圏層

に坐ます萬星界の神々は其数日に月に増し行きて、数百億の神人を現し、此の圏層の灵界建設に奉仕し給ふ。

これより数百億万年を經て今日に至りたるを思へば、宇宙創造の年代の遠き實に累然たれざるを得ざる次第なり。紫微圏層の灵界を稱して天極紫微宮界といひ、寸時も間断なくタカマの言霊輝き、東は西に、西は東に、南は北に、北は南に、上は下に、下は上に鳴りく、て鳴り止まざる言霊の元子は終に七十五声の神々を生み給ふに至れり。主の神は一貞の、より現れ給ひて、終に大虚空に紫微圏層を完成し、次第に五種の圏層を生み給ひて、灵国を闊き、諸神の安住地と成し給ひしを畏けれ、嗚呼言霊の玄妙不可思議力よ。

七十餘り五つの声を生みまして

五層の天界創め給ひぬ

此の至大天球の未だ成立せざるの神時代の天の古は唯至大浩々而氣盛
 たる極微點の神分子が撒霧に撒霧而至大浩々靈々湛々たる極微分子が
 漢々妙々たり。飄々冥々烈々合々恒々極々鑄々金々平々運々洞々今々ガ
 今々登々鞭々神々今々寂々今々照々電々精々令々鏡々既々着々今々洞々今々
 今々登々鞭々神々今々寂々今々照々電々精々令々鏡々既々着々今々洞々今々
 て萬性を含有し極乎として純々たり。神代神樂翁ニ番叟の謠に
 『タラターダララーラ タララーラ タララーラ タララーラ タララーラ
 タララーラ タララーラ タララーラ タララーラ タララーラ』
 と云ふは此神祕の轉化したる語にして、天の古開設の形容を顯示したるなり。
 故に此の霊声を總て一言に◎と謂ふ。此の◎の神霊を明細に説き明かす時
 は、吾界一切の大極本元の眞体及び其の成立の秩序も億兆萬々劫々年度劫大約
 恒々今々大造化の眞象も、逐一明かに資り得らる、なり。
 蓋し◎の言たるや◎にして◎なるが故に、既に七十五声の精霊を完備して純
 乎として各自皆その眞位を保ちつゝあり。然して其の眞位と謂ふは皆兩々相向
 ひて遠近皆悉く返対力が純一に密合の色を保ちて實相しつゝ、至大極乎として
 恒々今々造微臨々として点々たり。所謂至大氣壘の気が声と鳴り起むと欲して
 湛々の中に神機を含蔵するの時なり。故に吾に人たる者は先づオーに此の◎の

謂れを明かに知るべきものとす。何故なれば◎はスベラギの極元なればなり。

第五章 言幸比古の神

速言男の神は紫微宮園の吾界の萬神を指揮し修理固成し、永遠無窮に天の吾
 界の経綸に全力を盡し給ひ、茲に造化三神を初め四柱の神の空殿を造りて、至
 忠至孝の大道を顕彰し給へり。天の吾界の造化三神とは天極紫微宮に坐す、天
 峰火夫の神、宇迦須美の神、天津日餅の神に坐まし、左守と仕へ給ふは天津瑞
 穗の神、天津瑞穗の神の二神なり。又右守の神と仕へ給ふは高餅の神、神餅の
 神なり。速言男の神は一二三即ち灵力体の三大元を以て大宮に要する霊の御柱
 を造り給ひ、此の柱を四方に建て並べて霊の屋根を以て空を覆ひ、光輝燦然た
 る紫微の大宮を造營し給ひぬ。抑も此の宮は天極紫微宮と稱へ奉り、造化三神
 を初め左守右守の四柱神を永遠に祭祀し給はむが爲なり。此の時灵力体の三元
 又の言霊の玄機妙用によりて紫微宮の吾界に大太陽を顯現し給ひ、大虚空中に
 最初の宇宙を生り出で給ひたるなり。紫微宮天界の諸神は縁德萬里の果よりも
 集り来りて大宮造營完成の祝歌を謠ひ給ふ。速言男の神は紫微台上に昇りて声
 も巖かに
 『二三 四五六七八九十百千萬』
 と繰返し、謠ひ給へば、百雷の一時に轟く如き大音響四方に起りて紫微宮天

と繰返し、謠ひ給へば、百雷の一時に轟く如き大音響四方に起りて紫微宮天

界は為めに震動し、紫の光は四辺を包み太陽の光は次第々々に光彩を増し、現今の我宇宙界にある太陽の光に増すこと約七倍の強さとなれり。速言男の神は以上の天の教歌を唱へ終りて紫微宮の高御座に端坐し、兩眼を閉ぢて天界の完成を祈り給ふ。茲に速言男の神の左守神として仕へ給ふ言幸比古の神は言霊の発動に生れ紫微宮の莊嚴を祝して、

ア オ ウ エ イ
 カ コ ク ケ キ
 サ ソ ス セ シ
 タ ト ツ テ テ
 ナ ノ ヌ ネ ニ
 ハ ホ フ ヘ ヒ
 マ モ ム メ ミ
 ヤ ヨ ュ エ イ
 ラ ロ ル レ リ
 ワ ウ ヲ オ
 ガ グ ゴ ゴ
 ザ ジ ズ ズ
 バ ブ ヅ ヅ
 ボ ボ ヅ ヅ
 ビ ビ ジ ジ

と神声朗らかに宣り上げ給へば、天界は益々清く明けく澄切り澄渡り、ウアノ神、元子大活躍を始め、一瞬にして十萬里を照走する態電光よりも速かなりき。茲に右守の神言幸比古の神は左守の神の後をうけ給ひて、

ア カ サ タ ナ ハ マ ヤ ラ ワ ガ ダ バ
 イ キ シ ナ ニ ヒ ミ イ リ キ ギ ジ ガ ビ
 ウ ク ス ツ ヌ フ ム エ ル ウ グ ズ ツ プ
 エ ケ セ テ ネ ヘ メ エ レ エ ゲ セ デ ベ
 オ コ ソ ト ノ ホ モ ヲ ロ ラ ゴ ゾ ド ホ

と七十五声の眞言を横に誦ひ給へば、八百萬の神々は之に和して謹み敬ひ言霊を奏上し、タカくと拍手をなして喜ぶ歡き給ひける

第七章 太 被

天之高火男の神、天之高地火の神の二神は、紫微宮界の国土を經營せむとし、(国土と雖も靈的国土にして、現在地球の如きものに非ずと知るべし、以下總て之に準ず)先づ昧鋤の神をして、天界に遣はし給ひぬ。紫天界は紫微宮界の中央に位し、至晨、至美、至粹、至純の澄明國なり。先づ紫天界成り終へて、次に蒼天界形成され、次に紅天界、次に白天界、次に黃天界、次々にかたづけられぬ

り。本章に於ては先づ、紫微園界に於ける其才一位たる紫天界の修理固成につ
き其大略を説き明すなり。

ウの言霊の御稜威によりて天之道立の神は、其神力を發揮し給ひ、日照男の
神、夜守の神、玉守の神、戸隱の神の四柱をして晝と夜とを分ち守らせ給ひぬ。
玉守の神は朝を守り、日照男の神は日中を守り、戸隱の神は夕を守り、夜守の
神は夜を守り給ひて、天界の經綸を行ひ給ふ。併しなから紫微園界にては夜半
と雖も我が地球の眞晝よりも明るく、晝意志想念の上に於て夜の至るを感ずる
程度のものなり。朝は朝の想念起り、晝は晝の意志想念に感ずる程度
なり。我が地球の如く明暗さだかならざるも、霊的天界なるが故なり。天之道
立の神は諸神を従へて、紫微園界に於ける数千億萬里の靈界を非常の速力をも
つて經繞り、神業を活躍し給へり。至美、至明、至尊、至嚴の靈國も、燃ゆる
火の焰の末より出づる黒煙の如く、鈍濁の気凝り固まりて、美醜善惡の次第に
區別を生じ、最初の神の意志の如く永久に至善、至美、至尊、至嚴なる事、全
体に於て能はざるに至れるも、霊的自然の結果にして、如何に造化の神徳と雖
も、此醜惡を絶滅する餘地なかりしなり。總て宇宙一切のものには霊的に
體的にも表裏あり、善惡美醜混じ交はりて、而して後に確乎不動の靈物は創造
ざる、ものなり。神は至善至美至愛にましませども、年處を経るに従つて醜惡
分子の湧出するは、恰も清水の長く一所に留まれば、次第に混濁して腐敗し、
昆虫を発生するが如し。天之道立の神は、主の神の至善、至美至愛の灵性を攝

受し給ひて紫天界を圓滿清朗に且つ幸福に諸神を安住せしめむと、晝夜守りの
四神をして神事を取り行ひ給へど、惟神自然の真理は如何ともするに由なくさし
もの味天界にも、彼方此方の隅々に妖邪の気発生し、やうやく紫天界は擾亂の
国土と化せむとせり。茲に天之道立の神は、此の形勢を深く憂慮し給ひて天極
紫微宮に朝夕を誦する天の數歌を奏上しかつ三十一文字をもつて妖邪の気を削減
せんと圖り給ふが畏れけし。

天之道立の神は黄金の肌麗しく、裸体にて神前に神嘉言を奏上し給ふ。(紫微園
界は最奥天界にして此處に住する神々は總て裸体にましませり。然りと雖も身
心共に清淨無垢にましませば現在地球人の如く醜態を感ずることなく裸体その
ものが却つて美はしくかつ莊嚴に輝き給ふなり依つて最奥天界、第一天界の神
太は、いづれも裸体に在すこととは今日迄の靈界物語に於て説明したる如し。)

掛卷くも綾に畏き、むらぐ、さきの、極微点輝き、美はしき宮居にます主
の大神の大御前に帝司、天之道立の神、謹み敬ひ畏み、願ぎまつる。抑こ
の紫微園界は、主の大神とます天の峯火夫の神、宇迦須美の神、天津日餅の
神、三柱の廣き深き雄々しき御稜威により、一二三の力もて何れに争曲に造り
固め給ひけるを、日を重ぬ、月を閲し、年を経るま、に御世はやややに濁
り曇らひ、いと美はしく、嚴かなるべき紫天界の至るところに心汚き神々
の現れ表れりて、主の大神の大御心に背きまつり、神國を亂しまつる事、いと
も畏れ、い再びあれば、夜の守り、日の守りと四柱の神を四方にくまりて
敬へ論し守りまつれど、あまりに廣く國にしあれば、如何で全きを望み得む。

さほあ此吾等は神の大宮に仕へまつる身にしあはば、天津誠の大道を恫怛に
 奏曲に説き明し、もろくの荒ぶる神違を言向け合はし、大御神の御稜威を
 か、ぶりにて紫天界は神の造らし、昔にかへり、曇りなく濁りなく、曲の先だ
 に止めじと、祈る誠を聞し召し、吾に力を與へ給へ。惟神神の大前に一ニ三
 四五六七八九十百千萬布留辺由良、布留辺由良々々と幣打ち振り、礼打ち
 靡け、大御神樂を奏でつ、左手に御鈴を打ち、右手に幣ふりがざし、七
 十五声の言霊を恫怛に奏曲に宣りまつる。此の有様を平けく安らげく聞し召
 し相諾ひ給へと、畏みくも願まじつる。
 斯く太祝詞を宣り給へば、紫微宮の紫金の扉はギーギー、ギーギーと御音清し
 く左右にあげ放たれ、茲にキの言霊は鳴り出で、次にギの言霊鳴り出でましぬ。
 是より四方の曲津を斬り拂ひ、清め澄まし、天清く、神清く、道亦清く、百
 神の濁れる心は清まりて紫微天界は次第々々に妖邪の気湧き出でて世を曇らせ、諸
 神は荒び乱る、に至るこそ是非なけれ。茲に天之道立の神は朝夕のわからなく
 神を祭り、言霊を宣り、妖邪の気を拂はむとして拂ひ、言葉の功のいやりこな
 ることを悟り、初めて大被ひの道を聞き給ひしこそ畏けれ。 再拜。

生き／＼て生きの果なき天界の
 奏は人の眼には寫らし。

果てしなき紫微天界の神々は
 被ひ言のみ、せしみ給へり。

第八章 国生み神生みの段

天之道立の神は、紫微の大宮の清庭に立ちて布留辺由良、布留辺由良と大幣
 を振り給へば、紫微天界の西南の空を焦して入り来る神あり。其御姿は百有餘
 旬の大鰻の姿にして肌滑らけく青水晶の如く、長大身ながらし拜しまつりて權
 威の心を起さず、寧ろ敬慕の念に満たされつ、天之道立の神は紫微の大宮に鱒
 伏して

「来ります神は何神なりや」と
 と神慮を伺ひまつりけるに、

「天の峯火夫の神言し、今より来る神は太元顯津男の神」と
 と宣らせ給ひぬ。太元顯津男の神は紫微天界の成出でし最初にあたり、大虚空
 の西南に位置を定め、百の神業を司り給ひしが、やうやく大神業に仕へ終へ給
 ひし折もあれ、天之道立の神の生言霊の被ひの神業に感じ給ひて、此處に寄り
 来ませるなりき。太元顯津男の神は横目立鼻の神人と化し給ひ、大宮の御前に
 額づきて宣り給はんと
 「吾は主の神の神言し、西角の空を修理固成し終れり。吾の後は如何

にして神業に仕へまつらむや。何^{うまう}に委^{つか}曲^{まが}に事依^{ことよ}さし給へ。と、天津^{あまの}誠^{まこと}の言^{こと}霊^{たま}をもて祈^{いの}らせ給へは、紫微^{しゐい}の宮^{みや}居^いの扉^{かど}は雨^{あめ}ひ静^{しず}に開^{ひら}かれて、茲^{こゝ}に高^{たか}鋒^{かみ}の神^{かみ}、神^{かみ}鋒^{かみ}の神^{かみ}四^よ辺^へを紫^{むら}金^{ごん}色^{しよく}に照^あさせながら、儼^{げん}然^{ぜん}として宣^{のたま}りたまは

宣^{のたま}なりく、太元^{たいげん}顯^{けん}津^{しん}男^のの神^{かみ}よ、吾^{われ}主^{ぬし}の神^{かみ}言^{こと}もちて汝^なに宣^{のたま}り聞^きかず華^{はな}あり、懐^{なご}み畏^{おそ}み神^{かみ}業^{わざ}に仕^{つか}へまつれよ。是^{こゝ}より東^{あづま}北^{きた}萬^ま里^りの國^{くに}土^{つち}に於^おて天^{あま}界^か經^{けい}綸^{りん}の聖^{せい}場^ばあり、稱^{なづ}して高^{たか}地^ち秀^{しゆ}の峯^{かみ}といふ。此^{こゝ}の高^{たか}地^ち秀^{しゆ}の峯^{かみ}こそ我^{われ}主^{ぬし}の神^{かみ}の出^いでま

せし清^{きよ}所^{ところ}なれば、汝^なは一^{ひと}時^{とき}も早^{はや}く高^{たか}地^ち秀^{しゆ}の峯^{かみ}に下^{くだ}りて紫^{むら}天^{てん}界^かの經^{けい}綸^{りん}に仕^{つか}へま

つれ。八^や百^{ひゃく}萬^{まん}の神^{かみ}を汝^なに從^{したが}へて其^{その}神^{かみ}業^{わざ}を助^{たす}けしめむ。と、右^{みぎ}手^てに大^{おほ}幣^{へい}を打^{うち}ちり給^{たま}ひつ、殿^{どの}内^{うち}深^{ふか}く隱^{ひそ}れ給^{たま}ひぬ。茲^{こゝ}に太元^{たいげん}顯^{けん}津^{しん}男^のの神^{かみ}は天^{あま}之^の道^{みち}立^たの神^{かみ}に深^{ふか}く感^{かん}謝^{しゃ}の意^いをのべながら、時^{とき}遅^{おそ}れじと雨^{あめ}び長^{なが}大^{おほ}身^みに還^{かへ}元^{もと}しつ、光^{ひかり}線^{せん}の速^{はや}さより速^{はや}く見^みるく、姿^{すがた}を隱^{ひそ}させ給^{たま}へり。太元^{たいげん}顯^{けん}津^{しん}男^のの神^{かみ}は、天^{あま}の高^{たか}地^ち秀^{しゆ}の山^{やま}に下^{くだ}り給^{たま}ひつ、茲^{こゝ}に造^{つく}化^かの三^{さん}神^{かみ}を齋^いひ祭^{まつ}り、朝^{あさ}な夕^{ゆふ}に誠^{まこと}心^{こゝろ}の極^{ごく}み盡^{つく}し、言^{こと}霊^{たま}の限^{かぎ}りを竭^{つく}して、天^{あま}界^かの平^{へい}和^わ幸^{さい}福^{ふく}を祈^{いの}らせ給^{たま}ふ。紫^{むら}微^い園^{えん}界^{かい}に坐^ます主^{ぬし}の大^{おほ}神^{かみ}の御^ご稜^{りやう}威^いにより、平^{へい}らけく安^{やす}らけく清^{きよ}く明^{あきら}けく治^ちまりたれど、百^{ひゃく}萬^{まん}里^り東^{あづま}方^{かた}の國^{くに}土^{つち}は未^{いま}だ神^{かみ}德^{とく}に潤^{うる}はず。漸^{しだ}く妖^{あや}靡^みの気^き群^{ぐん}がり起^{おこ}り神^{かみ}々^々は水^{みづ}火^かの呼^よ吸^その疑^ぎ結^{けつ}より漸^{しだ}く愛^{あい}情^{じやう}の心^{こゝろ}を起^{おこ}し、神^{かみ}生^なみ業^{わざ}は日^ひ々^々に盛^{さか}なりたれども、善^{ぜん}惡^{あく}相^あ混^まじ美^み醜^{しう}互^ごに交^まはる惟^{ただ}神^{かみ}の攝^{しやく}理^りによりて遂^{つい}に混^ま濁^{だく}の気^き因^{いん}内^{うち}に満^みち、萬^{まん}の禍^{わざはひ}詳^{しょう}れおきむとせしを、甚^たく歎^{なげ}かせ給^{たま}ひ、高^{たか}地^ち秀^{しゆ}の大^{おほ}宮^{みや}

に百日百夜間斷なく祈り給へば、主の神はこゝにも再び現れまして神言嚴にのたまはく、

汝是より国生み、神生みの神業に仕へまつれ。其御灵代として八十の比女神を汝に從はしめむ。

と宣り給へば、太元顯津男の神は主の神の神宣のあまりに畏さに、應へまつる言葉もなく、宮の清庭に鱗伏して直ひたすりに驚き打ち慄ひ給ひける。

主の神より太元顯津男の神に對し八十比女神を授け給ひしは、神界經綸につきて深き廣き大御心のおはしますことなりけり。天界に於ても漸く茲に横目立鼻の神人現れ、愛欲に心乱れ、水に至善至美至愛の天界も濁り曇らひければ、其汚水を拂はむとして至善、至美、至粹、至純、至仁、至愛、至嚴、至重の神靈を宿し給ふ太元顯津男の神に對して、國魂の神を生ましめむとの御心なりける。譬へは醜草の種は生え安く茂り安くして世に寸効もなく、道を寒き惡虫を生じ足を容るゝ處なきまでに至るを憂ひ給ひて、至粹至純なる白梅の種を植ゑ廣めしめむと、八十比女神を御灵代に、國の守りと國魂神を生ませ給はむ御心なりける。曇り乱れの種を天界に請き廣むる時は益々曇り乱れ、遂には神明の光も知らざるに至るものなり。

言^{こと}霊^{たま}の水^{みづ}火^かに天^{あま}界^か発^{はつ}生^{せい}し、百^{ひゃく}の神^{かみ}連^{れん}生^{せい}れますなり。

山も川も大海原も言霊の
神の水火に生れ出でしものよ。

第九章 杵具の木の実

紫微天界 最奥灵国紫微の宮居に鎮まり居ます主の大神 天の峯火夫の神は
宮の清庭に彌茂り弥榮之つ、非時花咲き実る杵具の木の実を左守の神に余して
ましり取らせ給へば其数八十に達べり。
茲に主の神は虚空にその言霊を鳴り出で給ひて 杵具の木の実を右手に握ら
せ呼吸を吹きかけ給へば 艶麗なる女神の灵御口より生り出でまして杵具の木
の実に移らせ給ひ 茲に艶麗なる女神の姿生り出でましぬ。この女神の名は高
野比女の神と申す。次に一つの木の実を手握り玉の清水に滌ぎ給ひて御息を吹
きかけ給へば又もや女神成り出で給ふ。之を毒々子比女の神と申す。かくして
八十の杵具の木の実はいづれも天下經綸の御柱として貴の女神と現れ出でませ
り。

御鈴ふる屨の言霊幸はひて

八十比女神は現れましにけり
主の神は貴の木の実にみいきかけて

天界經綸の種を生ませり。
国生みの神の神業のなかりせば
この天地は開けざるべし。

顯津男の神の国生み御子生みは
大經綸の基なりけり。
国を生み又天を生み神を生み
人の子生める顯津男の功。

非時の杵具の木の実は主の神の
その味ひをよもしてなるけり。

顯津男の神の神言は八十比女を
御灵代として国をひらけり。

国々の国魂神を清らけく
生みおほせたる八十の比女神。
比女神の生みの功は大宇宙
大牛世界をやすく照せり。

茲に太元顯津男の神は 主り神の神言かしくみ高野比女の神にみあひて、高
地勢の宮に永久に鎮まり居まし 国を拓き神をよさめ 水火の呼吸をくみ合せ
もやひ合せて雲を生み 雨を降らせて あらゆる天界に湿りを與へ給へば 国
土に萬物發生し 天の狭田長田に瑞穂の稻は実り木の実は熟し、大嘗の神業漸

く完成を告げ給ふ事とはなり。顯津男の神は主の神の神言かしこみて宇都子比女の神、朝香比女の神、梅咲比女の神、花子比女の神、香具の比女の神、小夜子比女の神、毒々子比女の神、狹別の比女の神を近く侍らせ神業に奉仕せしめ給ひぬ。之を八柱の女神とも云ふ。この外七柱の比女神を紫微宮界の東西南北、遠近の国土に配りおきて、神の御靈代となし、大經綸を行ひ給ひしを畏けれ。

第二章 紫微の官司

天の道立の神は茲に主の神の大神言をもちて、紫天界の面の宮居の神司となり、遍く神人の教化に専念し給ひ、天津誠の御教を忼吟に奉曲に説き給ひ、太元顯津男の神は東の國なる高地勢の宮に神司として日夜奉仕し給ひ、右手に御劔をもたし左手に鏡をかざしつゝ、灵界に於ける靈魂、物負両面の守護に任じ給ひたれば、其神業に於て大なる相違のおはす事はもとよりなり。如何に紫微天界と雖も清淨無垢にして至賢至明なる神人数多おはさざれば、其統制につきてはいたく神慮を難ませ給ひたり。天の道立の神は個神々々についての誠を教へ給ひ、太元顯津男の神は宇宙萬有に對しての教化を司り給ひけるが、西の宮の教は意外に凡神の耳に入り易く且つ誠を誠として認め得るに反して、東の宮の

御教は範圍廣大にして小輩に閑はらず、萬有修理固成の守護なれば、いづれも凡神の耳に入り難く、遂には配下の神々の中よりも反抗者現れ来りて、顯津男の神をなやまし奉る輩一再ならざりける。顯津男の神は表に個神の悟り得べき西の宮の教を唱導し、聰明なる神人に對しては天下經綸の大業を説き明したまへば、其苦心又一方ならざりき。

第三章 水火の活動

大宇宙間に鳴りくゝて、鳴り止まず、鳴りあまれる嚴の生言灵ス声によりて七十五声の神現れ給ひしことは、既に前述の如し。又の言灵は鳴りくゝて遂に大宇宙間に火と水との物負を生み給ふ。抑々一切の靈魂物負は何れも又の言灵の生むところなり。而して火の性質は縦に流る、ものなり。故に火は水の力によりて従にのぼり又水は火の横の力によりて横に流る。昔の言灵學者は火は縦にして、水は横なりと云へれども、其根元に至りては然らず、火も水なけれは燃ゆる能はず、水も亦火の力添はざれば流動する能はず、遂に凝り固まりて氷柱と成るものなり。冬の日の氷は火の気の去りし水の本質なり、此理によりては縦に活用をなし、火は横に動くものなる事を知るべし。天界に於ける光彩炎熱も内包せる水気の

力なり。紫微天界には大太陽現れ給ひて左旋運動を起し、東より西にコースを取らるのみにして、西より東に廻る太陰なし。炎熱猛烈にして神人を絶対的に安住せしむる機関とはならずししかば、茲に太元顯津男の神は高地秀の峯にのぼり給ひ、幾多の年月の間、生言霊を奏上し給へば、大神の言霊宇宙に凝りて、茲に大太陰は顯現されたるなり。而して大太陰は水気多し火の力をもつて輝き給へば右旋運動を起して西より東にコースをとり天界の神人を守らせ給ふ。天之道立の神は大太陽を機関として、凡百の經綸を行ひ給ひ、太元顯津男の神は大太陰を機関として宇宙天界を守らせ給へば、茲に天界はいよ／＼火水の調節なりて以前に勝る萬有の榮を見るに至れり。太元顯津男の神は大太陰界に鎮まり給ひて至仁至愛の神と現れ給ひ、數百億年の未の古迄も永久に鎮まり給ふや畏れぬ。至仁至愛の大神は數百億年を経て今日に至るも若返り／＼つ、今に宇宙一切の天地を守らせ給ひ、今や地上の覆滅せむとするに際し、瑞の御霊の神靈を世に降して更生の神業を依さし給ふべく、肉の宮居に降りて神代に於ける御浩動そのまゝに、迫害と嘲笑との中に終始一貫盡し給ふこそ畏れぬ。大太陽に鎮まり給ふ大神を嚴の御霊と稱へ奉り、大太陰界に鎮まりて宇宙の守護に任じ給ふ神靈を瑞の御霊と稱へ奉る。嚴の御霊、瑞の御霊ニ神の接合して至仁至愛神政を樹立し給ふ神の御名を伊都能賣神と申す。即ち伊都は嚴にして火なり、能賣は水力、水の力なり。水は又瑞の浩用を起して茲に瑞の御霊となり給ふ。紫微天界の開闢より數億萬年の今日に至りていよ／＼伊都能賣神と顯現し、大

第一章 国生みの旅

宇宙の中心たる現代の地球（假に地球といふ）の眞秀良場に現れ、現身をもちて、宇宙更生の神業に盡し給うとせばなり。

火は水の力によりて高く燃え立ち上り、其熱と光を放ち、水は又火の力によりて横に流れ依きにつく、之を水火自然の浩用と云ふ。火も水の力なき時は横に流れ、立つ能はず。水は又火の力なき時は高く上りて直立不動となりて、其用をなさず。霧となり、雲となり、雨となりて、四方の国土を濕ほすも皆水の靈能なり。火を本性として現れ給ふ嚴の御霊を天之道立の神と申すも此の原理より出づるなり。次に太元顯津男の神と稱ふるも水気の徳あらゆる萬有に浸潤して其徳を顯すの意なり。故に天之道立の神は紫微の宮居に永久に鎮まりて經の教を宣り給ひ、太元顯津男の神は高地秀の宮に鎮まりまして四方の神々を初めあらゆる国土を濕ほし給ふ御職掌なりける。故に主の大神は太元顯津男の神に對し国生み神生みの神業を依さし給ひて、八十柱の比女神を御霊代として顯津男の神に降し給ひ、殊に才色勝れたる八柱の神を選びて御側近く仕へしめ給ひしは、天界經綸の基礎とこそ知られけり。茲に顯津男の神は天理に暗き百神達の囁きに堪へ兼ね給ひて、尊き神業に躊躇し給ひけるが、主の神の大神宣默し

難く、紫微の宮居に参ひ詣て、天の道立の神に告して、職掌を何れに委曲に宣
り給ひしかども、素より火の本性を有たず神なれば、顯津男の神の神言を諸に給
はず、紫微の宮居の百神達も言葉極めて顯津男の神の行動を裁きまつりけれ
ば、茲に御神は深く心を定めつ、高地秀の宮に歸らせ給ひ、一柱の待神も伴
はず、月光る夜半を獨りとぼく、立出でまし給へば、白梅の香ゆかしく咲き春の
榮城山横はる、茲に顯津男の神はほつと御息をつかせ給ひ、榮城山の頂に登り
て、日月兩神を拜し天津祝詞を奏上し、吾神業の完成せむ事を何れに委曲に祈
り給ひける。

顯津男の神は尾上に茂る常盤木の松を根こじにこし、白梅の香る小枝を手折
らせ給ひて松の梢にしばりまし、右手に手握り左手の掌に、夜光の玉を静に柔
かに捧げ持たし、松梅の幣を左右左に打振り、御声爽かに祈り給ふ。其神言
は忽ち天地に感動し、紫微天界の諸神は時を移さず神集ひに集ひまして、顯
津男の神の太祝詞言を謹み畏み聽聞し給ふ。

「掛けまくも、綾に畏き久方の、神國の基とめれませる、天の峯火夫の神は、
澄みきり、主の言霊の、神水、火をうけて、空高くめらはれ給ひ、心を淨め
身を清め、いよく、茲に紫微天界を初めとし、外に四層の天界を、何れに委
曲に生り出でましぬ、紫微天界の要天極紫微の宮を見たり給ひ、之を天の御
柱の宮となづけ給ひて、天之道立の神に、天界の事を何れに委曲に任せ給ひ、
神の御代をは聞かせ給へど、次ぎ、曇る天界の此有様を覽はし、吾を東に

つかはして、高地秀山に下らせつ、茲に宮居を造るべく、依さし給へば、ひた
すらに、畏みまつり、天津國の遠き近きに從ひます、山の尾上や谷々の茂木
の良き木を撰み立て、本打切り未打斷ちて、貴の御柱削り終へ、高天原に十木
高知りて、吾は朝夕仕へまつりぬ、百神達は紫微の宮居に對照して東の宮と
ははりつ、伊弉集ひて大前に、朝な夕な神嘉言宣り上げまつる折もみ此
主の大神は嚴かに、東の宮居に下りまし、國の御柱の大宮と名を賜ひたる尊さ
よ、茲に主の神もろく、の大御經綸と仕給ひ、あらゆる國を治むべく、國魂神
を生ませよと、八十柱の比女神を吾に下して御空高く天津御座に歸りまし、
ぬ、吾はもとより瑞御霊、一所に留まるべきにあらぬは、榮城山の上は今立ち
て、四方の神々さ、招き、職掌を委曲に、百の神々司神に、今あらためて宣り
告ぐる、百神達は主の神の、神言をうけし吾言葉、何れに委曲に聞召し、嚴の
御災は云ふも更、瑞の御災の宣言も、濱の牛鳥と聞きなびさす、心の契に納めお
きて、吾神業を救へかし、嗚呼惟神々々、天津真言の言霊もて心の丈を告げま
つる」

かく謠ひ終り給へば、百神達は何の答へもなく、鰭伏して合掌するのみ、時しも
あかや主の神の主の言霊は四方に響き渡り、微妙の音楽非時聞えて、其莊嚴さ
愉快さ響ふるにものなし、迦陵頻迦は満山の白梅に枝も撓に集り来りて、美音を
放ち、鳳凰は幾百千ともなく彼方此方の天より集り来り、榮城山の上空を悠々
翔けまはる様、實に最奥天國の有様なりける。

こゝに大御母の神は、数々の神々を従へ、數百頭の麒麟を率ゐて此處に現れ給ひ、山頂の廣場に整列して、顯津男の神の門出を祝し給ふ。茲に顯津男の神は大御母の神の奉りし麒麟に跨り山路を下り給へば、大御母の神を初め百神達は各々一人と麒麟の背に跨り、其他は鳳凰の翼に駕して従ひ給ふ。大御母の神は、清涼の気を送りて其炎熱を調和し給ひ、水火相合の祥徴實現して、紫微天界は忽ち淨土の光景を現しける。再拜。

一 高日の宮（高照山）

茲に月の大神の神霊瑞の御靈太元顯津男の神は、柴城山を下り大御母の神其他の諸神に送られて、神生み国生みの旅に就かせ給ひ、横たはれる東北の國原を指して夜を日に次いで進ませ給ふ。途中天の八洲河を東の岸に安々と渡り、高照山の聖地をさして道の隈手も恙なく須佐の川辺に着き八十比女神の一柱如衣比女神に會ひ、比女神の言灵に鳴り出でし銀の駒、天龍にまたがり進み給ひ、眼知男神に迎へられ高照山の山麓、高日の宮の清所につき給ふ。こゝに顯津男の神、如衣比女神の二柱神は大御母の神のとりもちによりて高日の八尋殿に目出度嬉ぎの式をとり行ひ給ひ、美玉姫命を生み給ひ、八十年の間、これの宮居に鎮り給ひぬ。

仕へ奉りし神々は、明晴男の神、近見男の神、日本の本の神、大物主の神、片照の神、真澄の神、光男の神にまじり給ひましき。言灵の水火より成り出でまし、神霊を總て神と稱へ、神と神との嬉ぎによりて生れませる神霊を命と云ふ。如衣比女の神は、高照山の中の高瀧にて禊し給ひ折しも頭に鹿の如き大なる角を生したる大蛇に吞まれて身失せ給ひぬ。こゝに高日の宮の神司等は、如衣比女の灵を厚く慰め終りて、中津滝の大蛇を言向けやはすべく、大御母の神、大物主の神、明晴の神、眼知男の神、真澄の神等、其他百の神々を伴ひて、愛善の真の言灵によりて言向け給ひぬ。大蛇は百神の生言灵にうたれ、蘇りつゝ、天高く立ち去りにける。 (七三卷「六」三九)

二 玉泉郷（東雲の国）

高日の宮の神司、太元顯津男の神は、主の神の属の言灵かゝりて、益き心の駒立て直し大御母の神、眼知男の神、味豊の神、輝夫の神を高日の宮の神司と定め置き、大物主の神、近見男の神、真澄の神、照男の神を伴ひ、天の白駒にまたがり、国魂神を生まばやと、心いそぐ東の国へ出て給ふ。途中横たはれる日向の大河を河守比女の神の奉れる駒にまたがり、彼方の岸に着き給ひ、河守

比女の神に安内され、東雲の国の玉泉郷の神館に入り給ひ、顯津男の神は八十比女神の一柱、世司比女の神にみあい玉ひて国魂の神、日向姫命を生み給ひぬ。こゝに顯津男の神は大物主神に玉泉郷の神館を守らせ給ひ東雲の国の東を明晴の神に、西の国は照男の神、北の国は眞澄の神、高照山の南方は近見男の神に任せ依りし、国造りの神業に仕へ給ひぬ。顯津男の神は日向姫命の神人を世司比女の神、大物主の神に頼みおき、河守比女の神に厚く謝辞をのべ南の国原さして只一騎出でまし給ひ。(七三卷「九」三五)

三 玉手の宮 (三笠山)

千里の野路をこえて横たゆる横河につき給ひ。

日向河に比ぶれば約二十分の一の流をから相当廣く水瀬深きを近見男の神の求めまりし駒にまたがり十一柱の神を従へて渡り給ひぬ。茲に太元顯津男の神は近見男の神、円屋比古の神達十一柱を率ゐて、三笠山の聖場玉手の宮に漸やく着かせ玉ひける。遠く眺めし霞の三笠山は、案に相違し百花千花全山に咲きみちて、其麗しき云はむかたなく天國のさまを目のあたりにはあらはしぬ。現代比女の神の鎮り居ますて玉手の宮は蜿蜒として近び廣がり、常磐の老松枝を交へて此清宮をこんもりと圍み、金砂、銀砂は月日の光を浴びて、目もまはゆき

ばかり輝き渡り鳳凰巢ぐひ、迦陵頻迦は常古の春を証ひつゝ、天國洋土の光景を現しつゝあり。三笠比古の神の案内に館に入り給ひ艶麗にして威嚴の備はる貴の女神(八十比女の一柱)現古比女の神と婚ぎの神業を終へ給ひ玉手姫の命を生み玉ひ、円屋比古の神をこれの宮居の神の司と定め、三笠比女の神に玉手姫命の養育を頼み置き、再び西南の国をさして、近見男の神其他を伴ひ出でまし其道すがら天の御中の神にあひ給ひて、相共に神業の爲進ませ給ひぬ。(七三卷「三六」以下)

四 眞鶴新国

顯津男の神の率ゐます近見男の神、円屋比古の神、其他九柱の御供の神の御名は多々久美の神、國中比古の神、宇礼志穗の神、美波志比古の神、産玉の神、魂嶽張の神、結比合の神、美味素の神、眞言嚴の神と申す。

國中比古の神は瑞御霊の御許しを受けて眞鶴の山に先登された。途中顯津男の神はにこり河の汚水を言霊の力に清め渡り玉ひ、清美河と云ふ名を興へ河岸の草の生に十一柱の神は夜を明し給ひぬ。

抑々紫微の天界は、大陽の光強く明るきこと、現代我地球の七倍にして、月の光又之に準ずると雖も、妖邪の凭鬱積して、未だ全く神徳に潤けざる遠遠の国土は、矢張り我が地球の如く晝夜の區別生じ、夜は暗く僅に月星の薄雲を透

して地上を照すのみなりしなり。故に顯津男の神 紫微天界を隈もなく明く清め 国土造り神生みせむと 百の艱難を忍びつゝ四方を廻り給ふや畏けぬ。顯津男の神は西南の空にかすむ真鶴山さして十柱の神を引きつれて進み玉ふ。近見男の神御前に仕へまつる。多々久美の神は雲をはらし風を鎮めてお伴につかえ奉る。

真鶴山は未だ地稚く柔く 恰も鴛きたての餅の如く湯気濛々と立昇り 山の姿さへ未だ固まらず 茫然として夢幻の如き丘陵なりける。而して真鶴山の周囲には底深き沼廣々と廻り湯気立昇り居る。

顯津男の神は生言灵に泥濘を困め狭霧を払ひ 沼水を乾し 声に生り出で給ひし多々久美の神は生言灵に沼水を一滴の温り無きまで乾かせ 美波志比古の神の生言灵に沼底の地を白くなるまで乾きたれば 産玉の神の生みませる 真鶴山に國中比古の神に迎へられ頂上に登り給ふ。

顯津男の神の生言灵に真鶴山の稚国土は次第々々に盛れ上り かくれ上がり固まりつゝ、真先に生み出でたるは常盤樹の稚松 白梅の莖 筍等なりき。真鶴の山灵は瑞御灵の言灵に感じ 産玉の神の御歌に呼びさまされて生代比女の神は生水玉ひぬ。

顯津男の神並に百神等は 真鶴山の頂に立ち生言灵をうる揃へ 東北東の空に向ひまし七十五声の靈を声も清しく宣り給へば 真鶴山は次第々々に真北の方に伸び廣がりぬ。それより百神等は 北 北東 東北 東の方東南 南

東 南の方 南西 西南 西の方 西北 北西と生言灵を七日七夜の間倦まず 怠らず方限りに宣り上げ繪へば 真鶴山は四方八方に伸び廣がり 膨れ上りて 目路もとつかぬ許りとなりぬ。真鶴山の膨張によりて 東西南北萬里の原野は 次第々々に水気去りて地固まりぬれば 茲に日出度真鶴國は何れに委曲に生れ出でにける。生代比女の神は瑞御灵に恋着し玉ひて遂に玉野湖底に大蛇となりてひそみしが瑞御灵の厚き心にほだされて解脱して龍頭の上に以前にまさる美はしき女神と更生し 歡喜は凝りて体内に御子宿らせ給ひぬ。

(七四卷「一七」)

五 玉 甘露 靈 山

顯津男の神は 一行の神々に送られて 玉野の森の聖所に駒を進め 其中央の玉野丘に八十比女神の玉野比女の神 本津真言の神 待合比古の神に迎へられて生代比女の神と俱に登らせ玉ひぬ。遠見男の神(近見男の神)以下の神々は 吾魂の曇れるを恥じ玉ひ禊して登丘の許しを待ち玉ふ。玉野比女の神は神生みの神業に仕ふべき適齡を過ぎし玉ひしかば層一層大なる国土生みの神業を仕けられ給ひて玉野山の清丘に永久の住所を定め 時を待たせ給ひつゝありける。玉の宮に詣でて主の神の化身本津真言の神と高嶺の神の化身力充男の神なり

しに驚き玉ひぬ。 顯津男の神は玉野比女の神 生代比女の神 待合比古の神 其の他数多の神々を従へて、悠々と丘を下り諸神に敬意を表し給ひ、雨や丘の上は一柱も残らず尊き給ひ、いよ／＼此処に因生みの神業に諸神力を合せて、

從事し給ふ事となりぬ。(七四卷「八」以下)

顯津男の神は玉の氣の汀に立たせ給ひて、真鶴の国土を愕然に巻曲に造り固めむと、七十五声の言霊を宣り上げ給へば、玉野丘は次第々々に際限もなく膨れ上り、右に左に南に北に四方八方に膨張して、真鶴山の頂上も真下に見るばかり高まり従ゆるに至りぬ。此の間殆んど七日七夜を費し給ひける。百神はおはしませども瑞御霊の如く澄み切り給はざれば、異口同音に言霊を奏上し給ふしなく、先づ顯津男の神生言霊を宣らせ給ひ、次に真言嚴の神の清き言霊を奏上して、真鶴の国土を無限大に拓き膨らせ給ひけるが畏けれ。其の他の神々は各自一柱づゝ言霊を宣りて神業を助け給ひたるなりき。

顯津男の神初め玉野比女の神 生代比女の神其の他の神々は、玉野官の大前に生言霊の祈願をこらし給へば、生代比女の神はこゝにいよ／＼月足ひ日経ちて、玉の御子を安々と産み落し給ひける。この御子産みの神業を助け奉りたるは、産玉の神にやありける。生れませる御子の名を牛代鶴姫の命と稱へ奉る。 門屋比古の神は神業のうまらに巻曲になりたるを見て三笠山に歸り玉ひぬ。 顯津男の神は玉藻山に於ける神生み因生みの神業を了へて百神達に別れを告げ生代比女の神と牛代鶴姫の養育を因中比古の神にまかせおきて、西の方さ

して立ち出で給ふ。 玉野比女の神は玉野大宮に親しく仕へ給ふが畏けれ。 顯津男の神の祈りによりて主の大神の御言のまに／＼魂結の神、中津柱の神、天降り玉ひて玉野比女の神の神業を補ひ給ひける。(七四卷「八」七五卷「六」)

六 西方の旅

顯津男の神は、七日七夜の旅を重ねて、濁流滔々と漲る、幅廣き水底深き日南河の南岸に着かせ給ひける。こゝに宇礼志穗の神、魂機張の神、結比合の神、美味素の神に別れを告げ、言霊の力に水あせし河底を悠々として彼方の岸に上らせ給ひければ、四柱神は安堵の胸を撫で下し、真鶴山、玉藻山の両聖地をさして急がせ給ひける。 顯津男の神は西方の国を拓かむとして、先づ才一に惡神の化神なるスウヤトゴル(聖なる山の義)を帰順せしめむと、日南河を北岸に打渡り給へば、こゝに照男の神は内津豊日の神、大道知男の神、宇志波岐の神、白造男の神、内容居の神、初産霊の神、愛見男の神の七柱を従へて出で迎へ給ふ。かゝる所へ美波志比古の神は駒に鞭うちしづ／＼と比場に現れ給ふ。こゝに日南河にて涙の神争を修し、わが心地清々しくなりしと宣せ給ひ。 顯津男の神の御後に従ひ、柏木の森を目当に、スウヤトゴルの曲津見を征服すべく、意気揚々と轡を並べて立ち出で給ふ。 スウヤトゴルに空を変じて、西方

の国土の天地を吾物とし 邪気は包み居たる大曲津見は高地秀の宮より降らせ給ふ朝香比女の神を 自ら顯津男の神と稱し迎へ奉りて 御子生みを為し 西方の国土を完全に占領せむものと 計畫怠らざりし処へ 真正の太元顯津男の神の間近に未り給ひしに驚き瑞御霊の一行を全滅せしめむと 部下の邪神等を集めて評議の結果 醜狐を柏木の森に遣はし 種々の謀計を興へて之に當らしめけるが 瑞御霊は其謀計を見破り 神々は各自生言霊の御歌うたひつゝ 曲神の棲める 柏木の森を何の艱みもなく突破し スウヤトゴル山脈さして 駒の轡を並べ悠然として進み給ふを畏き極みなりけり。(七五卷「セ」以下)

七 高地秀の官司

紫微天界に於ける神政樹立の根元地なる 高地秀の山の山麓に宮柱太敷立て 高天原に千木高知りて 四方に輝きたまふ高地秀の宮一名東の宮を後にして 思し召すことありとて 太元顯津男の神は 八柱の御樋代神を後に残し 一柱の供神をも連水給はず立出て給ひければ 茲に八柱の御樋代神は天津高宮に詣で給ひて 主の大神の神宣を乞ひ給ひ 官司の司たるべき神を降し給へと祈らせ給へば 主の大神は その願言を諾み給ひて茲に銳敏鳴出の神 天津女雄の神の二柱を降し給ひて 朝夕夕の宮仕へを言依さし給ひしこそ畏けれ。

高宮より高地秀の宮に帰らせ給ふ途中八十曲津見の神のつくりし巖骨の山に銳敏鳴出の神は千引巖を打ちつけ給へば巖と巖とは相摩して造り出でたる火の光に曲津神は驚きて御空遠く消之失せにける。紫微天界に於ける火の生れ出でしは銳敏鳴出の神の巖投げによりて始まれるなり。春の陽気は漂ひて 櫻花爛漫と咲き乱れたる真晝頃 高地秀の宮居に高野比女の神一行は目出度く帰りに給ひければ胎別男の神は觀迎の馳走の準備に立働さ給ひける。茲に高野比女の神一行は、大宮居の大前に裸被ひを終り感謝の祭典を行ひ給ふ。(七六卷「コ」以下)

八 朝香比女の神

こゝに朝香比女の神は 顯津男の神を慕はせ給ふ心の駒の狂ひたると、足掻き止まぬは 御樋代神等、官司等の心を籠め力を盡しての謀めも 空吹く風と聞き流し 白馬に鞭うち 黄昏の空を東南さして駆け出で給ふや雄々しけれ。後に残れる御樋代神等は高地秀の宮居の聖殿に朝香比女の神の旅の無事を祈らせ給ふ。朝香比女の神は途中狹葺の河瀬にさへざる曲津神を燈石の真火の光に退け東南さして大野原を進み給ふ。遙の空にぼんやりと霞む栄城山を目当に着かせ給ひける。栄城の山の神々は御樋代神出でますと 雁の使りに聞き知りまして 山麓に横はる細溪川の岸辺まで出迎へ給ふ。其の神の御名は機造男の神 散花男の神 中割男の神 小夜

更の神 親幸男の神の五柱にして、何れもウ声の言灵より生り出で給ひし神々
におはせり。朝香比女の神は栄城の山の聖場に暫し時をうつし給ひ、進ませ給
ふ。八十曲津見は朝香比女の神の行手を遮らむとして、廣大なる沼と体を変じ、女
神を惱まし奉らむとして待ち構へ居たりしが、女神の生言灵に固められて、忽
ち眞の沼となり、眞賀の湖水と命名、八十曲津見の本体なりし巨巖を磐楠船と
なして沼を渡り、百の曲津見はいづれも沼底の貝と変じてわづかに生命を保つ事
を許さぬにける。

比女神は沼を渡りて東南方の野辺をさして進み給へば程近き野辺の真中に丘陵
ありて国津神等の住家幾十となく建ち並び居たりけり。国津神の住へる村を
訪はむとして進ませ給ふ。国津神の長、狹野比古を従へて火食の道を教へ、眞
火をさづけ給ひて大野ヶ原を狹野比古を従へて勇ましく進ませ給ふ。(七六卷以下)
前途を擁して横はる東の河の河岸に黄昏る頃、辿りつきたまへは新月の光輝
き渡り東の河の水面一帯に大蛇横はり居れば、鋭敏鳴出の神の守りに言灵の力に
依りて駒に翼を生し空中を天馬に跨りて向う岸辺に難なく着かせ給ふ。狹野比
古は朝香比女の神の神徳を讚美しなから駒に跨り御後より果しなく霞立ち籠む
る稚国原を進み行く。漸くにして比女神は、非時深霧の籠むる八十曲津見の永
久の棲處なる、霧の海の岸辺に着かせ給へば、主の大神の大神言以て、比女神
の征途を守り補くべく待ち構へ居たる五柱の神は、比女神の出でましましる今や遷

しと待ち構へ居給ひける。其の神々の御名は初頭比古の神 起立比古の神(牙声)
立世比女の神(工声) 天中比古の神(サ声) 天晴比女の神(ハ声)にましまし給
る。

天津神六柱と国津神一柱は、霧の海の岸辺に生言灵を各自に奏上し給へば、忽
ち四辺の巖は大なる御舟となりて岸辺に軽く浮びける。御舟は数十里の波を渡
りて魔の島近く着きにける。朝香比女の神は八十曲津見の化身なる魔の島を生
言灵に島となし給ひければ天中比古の神は此島を譲り受け、諸々の草木五穀を生言灵に
生みまじつ、遂に狹野の食園を生み給ひ、永久に饑まり給ひける。朝香比女の神は狹野の神国を
拓き順風に送られて霧の海原(萬里の海原)を南へくと進ませ給ふ。
萬里の島の白馬ヶ岳の見ゆる折しも、大海原の浪は刻々に高まり来り、殆んど
御舟を呑まんとす。御舟は荒浪の間を木の葉の如く繰弄されつ、海中に漂ふ。
朝香比女の神は生言灵を歌ひ給ふや、伊猛り狂ひし浪は、吹く風に何のさはり
なく、忽ち鏡の齒の如き峻峻なる巖山となり、泡立つ小波は真砂となりて、一
つの生島は生れけるに、言灵生島となつて給ひ、舟の船先を白馬ヶ岳に向けて
進ませ給ひ萬里の島に着陸し給ひぬ。此の島は萬里の海原の島の中に、最も
廣くして地肥えたる豊の島ヶ根なりける。この島には幾千萬ともなき野馬と羊
棲息し、未だ一柱の国津神も住みたる事なき田族の島にぞありける。
かゝるところにこの島の御穂代神の田族比女の神の御使、輪守比古の神、若春
比古の神の二柱は白馬に跨り迎へに来りませば、一行の神々は田族比女の神の館

九 萬里の島ヶ根

天津高宮に鎮まり、ます主の大神は七十五声の言霊を間断なく鳴り出で給ひて、泥海の世界を固むべく、先づ初めに当りて筑紫ヶ岳、高千秀の峰、高照山の三大高山を生み給ひて後、萬里の海に無数の島々をなり出で給ひて、総ての生物を生ませ養ひ給ひべく経綸されたり。

其最初に當りて萬里の海の中心なる萬里の島を生り出で給ひぬ。此島は面積約八千方里にして、西に白馬ヶ岳あり、東に牛頭ヶ峰あり、其中心を流る、清川を萬里の河と云ふ。

茲に主の大神は、如何にもして此の美はしき萬里の島を永久の樂園に定めむと思召し、八十柱の御樋代神の中に、最も神力強き田族比女の神に若春比古の神(ウ)、保宗比古の神(エ)、直道比古の神(キ)、山跡比古の神(ヤ)、千貝比古の神(ミ)、湯結比古の神(ユ)、正道比古の神(マ)、輪守比古の神(ワ)、雲川比古の神(フ)、灵山比古の神(ウ)の十柱神を従へて、萬里の島を守りべく下したまひける。

田族比女の神は白馬ヶ岳の麓、禰ヶ谷にわたかまる邪神を言向和すべく十柱の神を従へ千里の荒野を駒の背に禰の大木の生ひ繁りたる泉の森の聖所につかせ給

ひ、御身自らは泉の森を策戦上より本堂と定め、輪守比古の神、若春比古の神を御側を守らせおき、其他八柱の神々を魔禰ヶ谷に出陣せしめ、悪魔を徹底的に掃蕩し給ひて萬里ヶ丘として一目散に帰らせ給ひけるぞ目出度けれ。

萬里ヶ丘の聖所に凱旋したる十一柱の神々は喜びのあまり祝宴を開くべく萬里の平原の生きとし生けるもの、悉くに駿馬使を遣し給ひければ、定めの日約束を待ちつゝ、八千方里の国土に、生きとし生けるもの等悉く先を争ひ雲霞の如く集り来りて異口同音に凱旋を壽ぎ給ふ声は天地も崩るゝばかりなりけり。

幾千万の馬も牛も羊も鼠も蛙も、先を争ひ萬里ヶ丘の聖所を十重二十重にとり巻き立錐の餘地なきこと前代未聞の大慶事なりける。

こゝに萬里の島は新しく国名を萬里の神国と稱へ総ての基礎を萬世に固め給ひぬ。かゝる処に朝香比古の神は天降り玉ひ、田族比古の神に燧石を回室として賜ひ、四柱の神を従へまし諸神に別れを告げ、御末矢の決辺より磐楯舟に乗り萬里の海原を東向の空さして辭かにノ進ませ給ひける。

主の大神の生み給ひし八十国八十島の中に、最も早く火食の道を始めたは、狹野の里なれども、国内一般に火食の道を開きたるは、この萬里の島をもつて濫觴となす。故に一名火の国と稱へける。

是より程経て朝香比古の神の勧めにより、太元顯津男の神は西方の国土を治め、朝香比古の神に国魂神の養育を任せおき、照男の神をして西方の国土を守らしめ置き、潮の八百路を渡りて萬里ヶ島に天降り給ひ、茲に田族比古の神に

御水火を合せ給ひ、左右りの大神業を終へて国魂神を生ませ給ひ、国土の基礎定まるを見すまし再び高照山北面の稚国原を修理固成すべく進ませ給ひしなり。
(七七卷「七」七八卷「二」)

一〇 葦原の国

朝香比女の神の来らせ給へる磐梯舟は、大小の島々を右に左に縫ひながら日の黄昏る、頃、神の集まると聞えたるゴロスの島に近より給ふ。この島にはゴロノス、ゴロスと云ふ猛悪なる大蛇の神棲息して、数多の醜神を役し、隙あらば總ての島々を侵さむとし、待ちかまへ居たるを夜のおくるを待ちて島に登り給ひ、初頭比古の神は朝香比女の神の御手よりうやくしく燧石を受取り、荒釜の如き固き石して燧石を、神言を奏上しつゝ、カケリと打出で給へば、眞火は辺りに秘散し忽ち幾年ともなく積れる葦草の茂れる根もとの枯草に眞火は移りける。幾千里に亘る大原野は、見るく、黒焦げとなりて彼方此方に龍神、大蛇、猛獸等の焼け亡びたる姿、天日に暴され、無残の光景をとゞめけるにぞ、御植代神は四柱の神に命じて各自、その遺骸を土中に埋めさせ給ひつゝ、数多の月日を費し給ひけるを畏けれ。

このゴロスの島に降り給へる御植代神、葦原比女の神を尋ねて駒に跨り進ませ給ふ途中、忍ヶ丘の国津神の眞火にて火傷せしを天の数歌にて救ひ、国津神野槌彦(妻神野槌姫)の教ゆるまゝに、ゴロノス、ゴロスのひそむ沼に向つて朝香比女の神は忍ヶ丘を本宮として野槌彦を近く侍らせ、四柱の天津神は鏡の沼の四方より生言霊を詔らせ給へば、ゴロノス、ゴロスの魔神は、鋭敏鳴出の神のウ声の言霊に黒雲を起し、中天高く鷹巢の山の方面さして逃げ失せける。朝香比女の神は四柱の從神と国津神野槌彦を案内役として、ゴロスの島を横ざれる中野河の濁流を言霊の力に陸地となして鷹巢山の麓なる鷹巢の宮居を立ち出で迎へられたる葦原比女の神一行に案内されて、葦原比女の神の廿年来鎮まり、ます櫻ヶ丘の聖所につき給ふ。

廣茅五千方里ありと云う葦原の島根は、朝香比女の神の生言霊の光りと眞火の功に曲津見の棲處は焼き払はれ、再び潜める鏡の沼の永久の棲處は打破られ、ゴロノス、ゴロスの邪神の巨頭も苦しさに堪へず、雲を起して鷹巢山の谷間深く忍び入りけられ、一時は平穩無事に治まりたれども、時ありて黒雲を起し天日を覆ひ、寒冷の気を四方に散布しけられ、萬物の発生に大害を及ぼし、再び元のゴロスの島に帰らむとしたるを、この度は葦原比女の神も朝香比女の神の賜ひし燧石の眞火の功により、諸神等を率ゐる邪神の潜む山野を焼き拂ひ給ひければ遂には葦原の国土をふり捨て、悪魔は遠く西方の国土に逃げ去りにけり。

葦原比女の神の一行は、朝香比女の神の一行を送りまゐらせつゝ、忍ヶ丘の山麓に春の永日は黄昏れにける。天の一方を眺むれば、一塊の雲片もなき紺青の

空に、上弦の月は下界を照し給ひ。月舟の右下方に金星附着して燦爛と輝き渡り、月舟の右上方三寸ばかりの處に土屋の光薄く光れるを打ち眺めつ、三千年に一度来る天の奇現象にして神有の事なりと、神々は各自御空を仰ぎ、葦原の国土の改革すべき時の到れるを感じ給ひ、葦原比女の神は朝香比女の神にはかりて、野槌比古の神、高比古の神、照比古の神、清比古の神、晴比古の神を、天津神に仕じ給ひ、今までの天津神を天津神とし、眞以比古の神は西の国土の司に、成山比古の神は南の國、冥生比古の神は東の國、榮春比古の神は北の國、八榮比古の神は忍ヶ丘の國、天津神の司に仕じ給ひぬ。茲に朝香比女の神一行の神々の立会のもとに葦原比女の神の英断の神任式は無事終了をつけ、天津神は天津神となり、國津神は天津神と仕けられて、いよ／＼葦原の国土の新生命は輝き初めにけるぞ畏れ。

妖邪の氣鬱積して黒雲天地を寒ぎ殆んど亡國に類したるグロス島の島は、天の時到来して、高地秀の宮居より朝香比女の神の御降臨によりて天地清まり、国内一稔の風塵も止めざるに至りたれば、茲にグロスの島國を葦原新國と改稱し、國津神を拔擢して葦原比女の神の國津柱の御側近く神業を司らしめ給ふ事とはなりぬ。国土の中心なる忍ヶ丘に宮居を移し給ひ、八尋殿を急ぎ見建て給ひて、國津神の上に臨ませ給ふ事とはなりぬ。國旗は朝香比女の神の給ひたる◎の玉を十ならべたはし十曜の神旗と神定め給ひぬ。

二 建國祭の祭典

このとき主の大神の御使ひ神なる鋭敏鳴出の神は十曜の神旗を振翳して雄姿を現はして祝し給ひ、再び光となりて数多の從神を伴ひ、紫の雲に乘りて宇宙をウー、ウー、ウーと生言灵も爽かに響かせながら天の一方に御姿を隠し給ひける。

茲に朝香比女の神一行の御供として、葦原比女の神は十柱の天津神國津神等を率ゐて、朝香比女の神の御舟を繋ぎし常磐の浜まで御見送り給ひぬ。

二 怪体の島

朝香比女の神一行は常磐の浜より御舟にのらせ給ひて萬里の海原を順風に乗り南へくと舟を進ませ給ふ折にもあれ、邪神の黒雲を鋭敏鳴出の神のみいつに退けて巨大なる巖島に大蛇のみそみて襲はむとするを朝香比女の神は生言灵の力に周圍約三里の島の根底より焼き盡し給へば大蛇は鷹巢の山の空指して逃げ行きにける。

それより東北にうかべる島に向つて進ませ給ふ折しも八岐の大蛇の御舟をろとも各まんとするを言灵の力に磐樺舟と俛に膨張させ給ひ、生言灵に海水を熱湯

と化せしめ給へば大蛇は遂に死体となりける
これより進んで歎の島に渡らせ給ひ、国津神、島彦、島稚に合ひ給ひ、起立比古
の神をして燧石もて原野を焼かしめ曲津神の福を払ひ給ひ邪神を祀りし為めに
禍をまぬきし由を説きさとし、主の神の御祭りと生言霊と禊の神事を教へ給ひぬ。
これより三千方里に渡る歎の島の国津神を救ひ給へば歎の島と生言霊かはりぬ。
(七八巻)

一三 葭原の国土

天之峯火夫の神、大宇宙の高天原に生れましてより、幾千年の星霜を經たれども、天未だ備はらず、地又稚くして、水母をす漂へる島々の中に、別けて美はしく地固まりし天恵の島あり。
この島を葭の島と云ひ又葭原の国土と云う。此の島は葭原の国土に比して約十倍の廣袤を有し萬里の海の中に漂う生島なり。
この島の中央に屹立せる高山を伊吹山と稱し、その麓をめぐる幾百里の湖水を玉耶湖と云ふ。この湖水の上流に水上山といふ饅頭形の大丘陵ありて、国津神はこの丘陵を中心にして安逸なる生活を送りつゝありき。
この里の酋長を国津神の祖と稱し、その名を山神彦と稱し、専の名を川神姫と稱へられる、其子艶男の龍女とみあひしてより天変地異となりて如何ともする

道なかりける。こゝに御樋代神朝霧比女の神は大御照の神、朝空男の神、国生
野の神、子心比女の神を従へて下りまし生言霊に、天災地変を鎮め給ひぬ。
茲に山神彦の御神、岩ヶ根に水上山をあづけて高光山の聖場に昇り給ひぬ。
因に高光山を麓として東に御樋代神の貴の御舎は建てられ、土阿の宮殿を造り
改めて土阿の国と名付け給ひ、高光山以西を葭原の国と名付け給ひ、葭原の国
土を総稱して貴の二名島と稱へ給ひけるを畏れ川。(七九巻)

一四 鳥

朝霧比女の神の神言畏み巖ヶ根は、葭原の国を至治泰平の世となし御樋
代神の恩命に報いむとして朝な夕な神を祈り、国津神を愛み以て国勢に餘念な
かりける。水上山より以東約十里の地點は山神彦の力によりて開拓され、国津
神等も心を安んじて耕作の業に従事し居たりとも高光山の山麓までは約三百里
の距離あり、巖ヶ根は如何にして開拓せむと日夜焦慮しありける。其子は
春男、夏男、秋男、冬男の四柱の成年者なりける。葭原の国土は其名の如く地
上一面葭草に充たされ其間に毒草水莽草を生じ其毒に中り忽ち生命を落すか
故に国津神等も禽獸虫魚も、其の難を恐れて廣き原野は棲む者なかりける。
唯生命を保ち得る者は甲羅の有る鰐に似たる海獸と蛇と蜈蚣を混同したる如き

イゲケと云ふ爬虫族の棲みてありゆる人畜に害を興へけ此は国津神の住むに應はず。開拓の如めより葭草や水奔草の茂るに仕せありけるが其物凄き華言語に絶せり。先づ第四男の冬男をして冒險の旅行に出発せしめたるが途中水奔鬼に笑ひ誇り爲めに身失せける。秋男は父の命によりて松、竹、梅、櫻を伴ひ火炎山に昇り火を取らんとして猛獸毒蛇の爲めに身失せし折りしも、火炎山は爆発して大湖水となりける。猛獸毒蛇水奔鬼の大部分は全滅の厄に遇ひぬ。

叔て高光山に天降りませる朝霧比女の神、大御照神、朝空男の神、国生男の神、子心比女の神は高光山の頂きなる岩窟の空座に集り遙かの西方に当り大爆音聞え、火炎山の天に冲する火焔は跡形もなく消之失せた此は神議の結果、朝霧比女の神の命もちて、大御照の神は楔を修して神示を受く事となり、朝空男の神と国生男の神は鳥舟を造りて豫讃の御国に天降り給ひ、冬男、秋男等の精霊を救ひ又春男、夏男の冒險隊を救いて各自安全地帯へ運びて高光山に凱旋し給ひた。子心比女の神は山神彦の息子豊男の子龍彦の守をしつ、朝香比女神に仕へまつた。かゝる折しも此神の力を全身に満して大御照の神溪間の雲を別けて青木ヶ原の聖場に漸やく帰り着き給ひ、神意を傳達し玉うにぞ、朝霧比女の神の神言により大御照の神、朝空男の神、国生男の神は鳥舟に集り、松浦港に降り、朝香比女の神一行を青木ヶ原の聖所に迎へ歸られた。高光山の聖場は御植代神、朝香比女の神の降臨に依り輝き漲り青木ヶ原の神苑は瑞雲棚びき、新生の気四辺に漂ふ。朝霧比女の神は朝香比女の神より賜いたる燧石を大御照

の神に命じ諸々の神等を従へ天鳥舟に塔乗させ燧石を以ちて地上に降りしめ風に集りて葭原に火を放たしめ給ひけは折から眠き来る疾風に火は四方八方に燃え渡り猛獸、毒蛇、水奔草、葭草等の原野は忽ち火の毒となり其の壯觀驚ふるに物なかりけり。愈々葭原の国は真火のいさをに依りて土阿の国土も豫讃の国原も曲神の影も留めざるに至り、新しく生き榮ゆる事となりぬ。此処に山上の宴会は終了し、朝香比女の神の一行に厚き感謝の辞を述べ松浦の港迄朝空男の神、国生男の神をして鳥舟を操らせ御植代神の一行を安く送りける。こゝに朝霧比女の神は朝香比女の神の好意に報いんとして鳥舟造りに功ある国生男の神を御供に仕うべく遣はし給ひたるなり。此れより一行六神、駒諸共御舟に浮びて西方の国土さして出で給ひける。(八〇巻)

一五、伊佐子の島

高照山の西側に當る万里の海上に相當面積を有する島国あり。此れを伊佐子の島と云ふ。この島の中央に大山脈東西に横たはり、此れを大栄山脈と稱せり。此の山脈以南をイドムの国と云ひ以北をサールの国と云ふ。この島は万里が海の島々の中にも最も古くなり出でし島にして国津神等は数多棲息し、イドム、サールの兩國は互に其の領域を占領せむと数十年に亘りて戦争止むときなく

数々の国津神等は塗炭の苦を嘗め救世神の降臨を待つ事恰も大旱の雲霓^{うんげい}を待つ
の感ありける。(八一巻)

以上